「あんただけが、僕のおじいちゃんなのだ。」

小堺瑛仁　（20 代）

僕には血のつながったおじいちゃんがいない。

父方も母方も、僕が生まれる前に亡くなっている。それでも父方の祖母が再婚したことで、僕にはおじいちゃんができた。

このおじいちゃんが恐ろしくハゲていたから、血がつながっていないということをよく理解できていなかった幼い頃の僕は、自分も将来ハゲるのではないかと恐れ、おじいちゃんのハゲた頭に、髪の生える魔法をかけるように触れていた。

かなりの頻度でなでたり、たたいてみたりもしたが、おじいちゃんは楽しそうに笑っていたので、死んだはずの毛根も蘇るかもしれないと思っていた。

いびきがうるさいから兄と一緒に鼻をつまみ、口も塞いで、静かにしてもらおうとしたこともある。いびきは治まったが「なにしてるんだおめえら！じいじ死んでしまうぞ！」と、なぜだか嬉しそうな、いびきよりもうるさい声を出させてしまった。

僕に散々ハゲ頭を触られ、何度も眠りを妨げられたこのおじいちゃんには悩みがあるらしい。母から聞いた話だと、僕らと血がつながっていないことを心配しているらしいのだ。その話を聞いて、なんの心配をしているのかよくわからなかった。僕はそんなこと考えたこともなかったからだ。

今更「血はつながっていないけれど、おじいちゃんだと思っているよ」などと言うのは嘘くさい、それに僕らの関係に特別な言葉なんていらないはずだ。そんなものなくたって、僕とおじいちゃんの生きた時間は、僕の中を流れる血よりも確かな温度を持って残っているし、何を隠そう僕にとっては生まれたときから唯一のおじいちゃんなのだ。

ただのおじいちゃんなら、少年野球の試合を観に来てくれたとき、ヒットを打つところを見せられなかったことが悔しくて、ユニフォームを濡らしたりなんかしない。

お好み焼きを食べた帰り道で、僕が眠り込んだ大きくて温かい背中は、紛れもなく「僕の」おじいちゃんのものだ。

眠る前、僕を見つめていた優しい瞳も、紛れもなく「僕の」おじいちゃんのものだった。

記憶にいるおじいちゃんは全部「僕のおじいちゃん」なのだ。

それでもまだ心配だというのなら、もしもおじいちゃんが歩けなくなる日が来たときには、僕が大きくなった孫の背中を教えてあげようと思う。どうしても不安になる日があったとしても、今の僕を形作っているおじいちゃんとの時間の数々を、僕が忘れることなんてないのだ。

まだまだ元気にママチャリを漕いでいるし、相変わらず髪の毛は一本も生えていない。

僕はハゲていないし、おじいちゃんとの時間を忘れないことの証明ができるものなんて何もないのかもしれない。

だけど心配するな、じいじよ。あんただけが、僕のおじいちゃんなのだ。